

## 絵本について（その二）

——学生における絵本覚えがき——

松 里 雪 子

### 言 語

赤羽末吉の『おおきなおおきなおいも』は幼稚園のこどもたちが主人公である。計画をして、たのしみにしていたいも掘り遠足が雨で中止になった。“つまんない、つまんない”と騒ぐこどもたちに先生が発案する。一日ねるといもはどんな風になるのか……こどもたちのイメージがつぎからつぎへと楽しくわいてくる。——おおきなおいもはどうやって掘るのか。おおきなおおきなおいもはどうやって運ぶのか。おおきなおおきなおいもはヘリコプターを二機つかって園庭に運ぶ。そしてプールに入れて船にする。名づけていもまるである。つぎは恐竜のいもごうるすに変身し、最後はてんぷらにやきいも、だいがくいものおいもパーティとなる。みんなで作って沢山食べたおいも料理でおなかはパンパンになった。それでそのまま宇宙旅行になった。——白と黒とピンクで描かれている。シンプルな絵、赤みの強いピンクで描かれたおおきなおいもをめぐって、黒の線がきのこどもたちのひとりびとりの動きや心が実によく描かれており更にイメージが広がる。場面場面におけるこどもたちの歓声のどよめきが耳の奥にこだまして残る。

佐藤さとる文、村上 勉絵の『おおきな木がほしい』はかおるという男の子が主人公である。庭にあるちいさい木を見て、そういうやつでとかつじとかではなく大きい木がほしい、というところから始まる。そして大きな木がもしあったとするのなら、こんな事をするんだ、ということを描いている。——太い枝の上には台所も寝室もある家をつくる。

台所には窓に向かって流し場もあり夏は料理を作る。秋には読書をして……とつぎからつぎへと想いは広がる、部屋の調度品も季節に合わせて変えてたのしむ。こどもの時分にたいていのこどもが望んだもの——大人たちとの関わりはいれない。制約のない自分だけの自由なたのしい生活の、その空間がほしい。そして秘密の、と——が発明と発見のたのしさをイメージに広がりをもたせる事でかなえている。かつてロビンソン・クルーソーの物語を初めて読んだ時の感動を思い出す絵本である。

中川李枝子作、中川宗弥絵の『ももいろのきりん』はるるこという女の子が主人公である。母親からもらったおおきいももいろの色紙で世界一のきりんを作る。そのきりんは動くことができ、るるを背中に乗せて一緒にあそぶ。るるを含めて沢山のこどもたちが日頃からかなえてほしいな、と思っていることが自然なやさしさをもってかなえられる。我々には過ぎた時間を懐しく思う作品であると共に、こどもであった頃の感性が喚起される思いが生じる。またそういう気分を味わったことで以前もっていた感性の存在を再確認した思いになる。そして今あらたに別の隠しポケットにいれて持ち歩き、随時取り出し自由に直ちにたのしめる通行手形を入手したようで小踊りしたくなる気分である。またそれは錯覚と願望が同居してエスカレートした事への偶像のあらわれかな、と危惧の念が生じる事も確かである。しかしいづれにしても素直にこどもの頃にかえってたのしめる事は確実に有ると思っている。紹介する機会のある事がただただ嬉しく思う作品である。

レイモンド・ブリッグズの『さむがりやのサンタ』は 社会 の領域の方があるいはもっとも妥当であるかも知れないのだが……。この中でのサンタは実に人間くさいのである。町内会のお世話役の小父さん風に描いている。従来より知っているかの如き慈愛にみちみちた笑顔のその人ではないのである。寒さを愚痴り、熱い紅茶を時間をかけていれ、たのしみながら綴るという具合に描いて既製のサンタクロースのイメージを打ち壊している。偶像化されつつあるところからともすると神話化されているような錯覚をさえ持っているかの人(!!)の存在が実に明確な立場で登場してくる。こどもだましの杵をとび越えたかの観があって小気味よい。その杵をとび越えた(!!)分だけ物ごとをよりひろく柔軟性をもってたのしめる気分になる絵本である。

ディズニーのまんが映画の色彩を見なれている人にとってはほんの一瞬、あらっずいぶん地味なこと！と思うかも知れないのがフェリクス・ホフマンの『ねむりひめ』である。これはグリム童話を絵本化したものだが、絵が殊更に素晴らしいのである。シンプルな色使いの訳に合って共によく物語を語っている。ページをめくるとにほんの一瞬の最初の印象は霧散している事にも気付かない程に魅せられているに違いない。場面の要所要所にすてきな あそび心 が見られる。そのことが場面に臨場感を添え巧みに語る。しっぽの長いおなかのまっ白なきじ描がよく登場する。姫の誕生の祝宴に招かざる客として現われた13番目の占い女がいよいよ呪いをかける場面では、その長いしっぽをさか立てて父王のガウンの裾に頭を入れようと必死になっている様子で描かれている。約束の時がきてお城の総べてに魔法がかかり、蜿蜒と眠りの時をすごすのであるが、その 時 の流れはコック見習いの男の子の帽子とつる草の茎が教えてくれる。そして呪いもとけ婚礼の終わったあとのパレードのあとにまだページがあって……。あのコック見習いの男の子が得意気に持っているのは自分の背丈の3倍は

あろうかと思われるウェディングケーキなのである。この絵本の取って置き場面でもある。さり気なく大事に扱いたい場面である。こどもたちはどんな反応を見せるのだろうか。大人以上の注意力で見て、楽しむことを知っているこどもたちは……いずれにしても楽しみの多い絵本である。

谷内こうた 絵、蔵富千鶴子 文で『のらいぬ』という絵本がある。これは一人ぼっちののらいぬが、ある夏のあつい日に砂山で麦わら帽子をかぶったひとりの男の子に出遭ってあそぶ幻をみた物語である。出遭いのあとののらいぬと男の子は静かなやさしい時の流れを共有する。あそびが駆けつことなり灯台へゆき、展望台にのぼった。白い雲の浮いているひろい青い空をバックに白い灯台から男の子が静かにとぶ。つづいてのらいぬもとぼうとする。すると、それまで静かに見ていたこどもたちから異口同音で一斉に「とべ!!」の声援がかかる。言葉少なく大切なことを語って心に残る絵本である。

馬場 のぼる の『ぶたたぬききつねねこ』は動物の楽しい絵と言葉のシリトリあそびの絵本である。ページをめくってよんでいるうちに自然にリズムとメロディがついてくる。くりかえすことの楽しさがある。3歳未満児たちに見せたらどうだろうか、多分黙ってすわっていることはないに違いないと思うのだが……。

谷川 俊太郎詩、瀬川 康男絵の『ことばあそびうた』もすてきな日本語のあそびの絵本である。語路のよさがいつの間にか記憶に残っているようである。その絵本とは直接に関係のない時などでもポロポロッとこぼれ落ちるように出てくる。

馬場 のぼる の『五助じいさんのキツネ』はマンネリ化のない意表をつくおもしろさがある。五助じいさんのところのキツネは五助じいさんと一緒に暮らすようになってからというもの、だんだん人間くさくなってしまった。“これではいけない”と思った五助じいさんはキツネらしくなるようにと化け方を習わ

せることにした。そこでこのキツネの習ったことといえば他のキツネたちと違って、いち番立派なものに化ける、と言われるといつも決っていて五助じいさんが水筒がわりに持ち歩いている湯タンポなのである。ある日他のキツネたちと一緒に町へ出掛けてみると……。時々難しい言いまわしや現代ではあまり使われなくなっている言葉などが入っている。こどもたちは得てしてその類の言いまわしを見つけるのは得意であり、また気に入るといつでもどこでも使う。死語になりかけていたものが復活したかの思いもわいてきて何とはなしにほほえましくも嬉しくもある。

また『きつね森の山男』もおもしろい。ふろふき大根の大好きな山男はきつねと大の仲よしである。ある日、大層な寒がりのためきつねの毛皮が大好きな殿様ときつねのために戦うことになった。戦いには勝ったのだがその後大きな大根を持ち歩いていて捕えられてしまう。しかしそのために寒がりの殿様は山男から教えてもらったふろふき大根を食べてみた。すると……。とてもユニークで比類のないユーモアと温か味がある。無理のない奇想天外なところが実にいいと思うのである。素直に見れてケロケロと笑える楽しい絵本である。こどもたちの発想にどこかがよく似ている。そんなところからもこどもたちにおはなしを作ってもらう時など、そのきっかけとなり得るものと思われる。

レオ＝レオニの『フレデリック』——ちょっとかわったのねずみのはなし——という絵本がある。冬が間近くなってきた。他の4匹ののねずみたちはせつせと食糧を石垣の塹へ運んでいる。しかしフレデリックだけはじっと座っている。仲間たちは彼に訪ねる。何故、何もしないでじっとしているのか、と。するとフレデリックは自分は何もしていないのではなく、やがて来る寒い冬の日のために

おひさまの光を集めているんだ  
色を集めているんだ  
言葉を集めているんだ  
冬は長いから話の種もつきてしまうもの

と答えた。やがて冬がやって来た。そのうちに貯えた食糧は底をついた。いよいよひもじくなった時にあの4匹はフレデリックのあの時のあの言葉を思い出していた。そして聞いてみた、「きみが あつめた ものは、いったい どう なったんだい、フレデリック。」と。すると彼はみんなの前の石の上にすすんだ。そしてみんなには目をつぶってもらった。そこで彼は語ったのである、ひかりといろのおはなしを。フレデリックの語らいのあと彼らはとても満ち足りたのである。そして彼らはフレデリックを“詩人”であると称えるのである。詩人であるフレデリックに少しばかり羨望を嫉妬を禁じ得ないことは確かであるが、創造することの原点、芸術作品が我々にもたらししてくれるものの素朴な仕合わせの原型が奇を衒うことなくどっしりと横たわっている思いのすることも確かであると思う。

谷川俊太郎作、元永定正絵の『もこ もこ』は不思議な絵本である。

しーん もこ もこもこ によき  
もこもこもこ によきによき ぱく  
もぐもぐ つん ぼろり ぷうっ  
ぎらぎら ぱちん! ふんわ ふんわ  
ふんわ ふんわ ふんわ ふんわ  
しーん もこ

これが30ページの場面に書かれた言葉である。そして絵は色鮮やかで豊かで動きを感じさせる大型の絵である。しかしこれだけ書いたのでは何が何やらこの絵本のことは伝わらない気がする。無論、現物を手に取ってみるのがいち番いい方法ではあるのだが……。その他の方法といえはこの文章を声に出して読んでみることである。できるだけゆっくりと、できるだけのんびりした声で、そしてていねいに。声は気取らずに作らずに、実際に声に出して読んでみて3ページあたりにすすむと頬の筋肉が自然にたのし気に活動していることに気がつく。読み方に、ゆっくりとのんびりした声で、という制限はひとつもない。——やはり、これは絵と一緒にないと語るのはすくなくならず無理があるようである。できるだけ早

いうちに手に取って見ていただきたい。その後はそれぞれが感じ得たところで楽しむことができるのであるから、講義のなかで諸君の先輩たちに紹介をする場合はマイクの持つ威力を借りた。その効果は大きいようである。それは呼吸のひとつひとつを逃さずていねいに伝えてくれるのであるからだと思っているのであるが、重ねて言えば、これは文字の組み合わせによるひとつの言葉、ひとつの文章というものの持つカタイ概念にあまりこだわを持たずに実に流動的である。選び抜かれた言葉からはいい音生まれるようである。その音が不思議な響きを伴って見る、聞く、その人の感性を擽るようである。すでにこの絵本を見た経験を持っている人の場合には最初の文章の——しーん も こ も こ も こ……——を耳にただけでも笑いの表情がすぐに浮かぶ。何やら共犯者めいた仲間意識の確認が出来た思いがするものである。しかしそれはやはり一度その絵を見た経験を持っているからである。この絵本は絵と文章が一体となり、 $1+1=2$  では決してなくて、 $1+1=3 \text{ or } 5 \text{ or } 7 \dots$ と正に相乗効果の最も大きいものの一冊であると思う。日本語っておもしろいなと思うことのできる嬉しい絵本であると思う。

『もこ もこもこ』はいまだその存在を知らない人たちに出遭いの場を設定し、その読んであげる場に臨むことを春を待つ気持ちでいることの出来る絵本の一冊であるが、他にもまだある。それは『ぐりとぐら』を知っている人であれば、「なあ～んだ、それなら知っている！」と言われるかも知れないのだが、なかがわ りえこ文 なかがわ そうや画の『こだぬき6ぴき』である。「つきみ山のてっぺんに、8ほんのドレミファ杉にかこまれたたぬきのたぬきちさんの家があります。」で始まるこの絵本では、たぬきおとうさん たぬきおかあさんと5月1日という同じ日に生まれた まめいち まめじ まめぞう まめよ まめこ まめろく のこどもたちの一日の暮らしを描いた物語である。そしてこの日

はたぬきおとうさんがコンダクターとして活躍するすすき山での夜の音楽会へ出掛けた一日のおはなしである。クレパス、クレヨン、色鉛筆など日頃こどもたちの使いなれている道具で一見無雑作に描いたと思われがちな挿絵が実によく、親しみがわく。しかし、無雑作とは失礼な話で、よく見ると登場人物たちの表情がイキイキと文と共に語られている。おとうさんに甘える 家に入る 食事をする などなど一つ一つの出来ごとの動作が作者たちのあそび心も手伝って夫れ夫れの特徴をよく伝え、分け隔てなく扱っているところなどもおもしろい。ちいさなこどもたちには自分たちの日常と同じ日常を送っているこだぬきたちにどんなにか嬉しいともだちを感じるのではないのかなと思うのである。読んであげる時のこどもの目、息づかいなど読む方はそれらの事を見落さず、聞き漏らさずにいれば絵本を読んであげるということの醍醐味もまた十分に満喫できること請け合い可能である。これは 音楽・音楽リズム の領域の方かなとも思うが形としてではなく内容からみて言語 の領域の方が妥当かと思う。

いつもユニークな発想で楽しませてくれるトミー＝アンゲラーの絵本（いまえ よしも訳）に『すてきな 三にんぐみ』がある。黒マントに黒ぼうし、持つている武器はラッパじゅう こしょう・ふきつけ まっかなおおまさかり という三にんぐみのどろぼうたちが登場する。ある夜、宝もののかわりによって……おはなしはすてきに展開するのである。トミー＝アンゲラーの大胆で（大胆ではあるが、大雑把ということではない。時として、アンゲラーの出身のヨーロッパの風土も感じさせるような表現があったり、と現代風でありながら古風なものとの組み合わせが非常によくとけあっている。）愉快的絵と、切れ味のよいリズムカルな日本むかしばなし風の訳は妙に合っていておもしろい。

自然エネルギーで動く彫刻を作る芸術家として国際的にその名を知られている 新宮

晋 の絵本『いちご』は、

私はいちごが大好きです。いちごは一口で食べられるほど小さいけれど 大きな自然から生まれました。

で始まる。あのつややかな苺、甘くて赤くてみずみずしい苺。スーパーでパックされた苺、畑で摘み取られるのを待っている苺、まだ準備段階中の苺といろいろあるけれども、つまんで目の前に置くと、色とかおり、そしてつぶつぶのついた形にと何やらホカッと心の温まる思いのする食べものだが、その苺を丹念に見て受け取め、ひとつの絶大なる小宇宙を詩と絵で形成している。これも是非一度は手に取って開いて見てほしい。思わず、すごいと声が出る。これ程自然を身近に感じ崇め賛歌し得る人も少ないのではないのかと思う。苺を扱った絵本ではあるが生きていることの素晴らしさをふつふつと感じさせる。大きく深呼吸をしたあとのひろびろとしたのびやかな感じにも似ている。見たことによって胸のなかで豊かに広がりゆくものの芽ばえの幸福感を味わうことを余儀無いものとされる絵本である。

#### 音楽・音楽リズム

馬場 のぼる の『11ぴきのねこ』は実に愉快である。とらねこたいしょうとその他の10ぴきはいつも腹を空かせている。そこで大きな魚が住んでいるという処めざして出発した。しかしその魚は並大抵のことでは捉まえることができない。ところが偶然にもその魚の弱点を掴むことができた。そしてある晩、“ねんねこさっしやれ”の唄に魚は大いびきをかいて眠り込んだところを透かさず襲い、ついにねこたちはその魚を捉まえることができた。そして彼らは住処に帰り着くまでは誰も絶対に食べないという約束を取り決め、いかにだをすすめた。しかし、まっ暗な夜が明けるとそこにあるのは……。こどもたちの愉快的笑いがこのページにきてドツとおこる。個性豊かなねこたちを学生たちはよく活用して、更に大きく楽しんでもらっている。それは大

型の紙芝居であったり、ペープサートであったりする。また、テンポのよいリズム感のある絵本であるところからもオペレッタにしてみれば絵本の持つ味とは違う味のコメディになるに違いない。——11ぴきのねこ なのであるが、とらねこたいしょうだけが固有名詞を持った1ぴきで他の10ぴきはその他大勢ということではない。夫れ夫れが身近な何処かでよく見かけているようなクセを持った個性を持ったキャラクターとして大事に描かれている。演ずる場合に本来は“11ぴき”にこだわるべきであると思う。しかしその逆もまたいいと思うのである。数が足りない時は足りないなりに、11ぴきからマイナスになった数の分だけ在る数に集約させればいいのである。また多い時は増幅させて、よりその個性を何人がかりかで強調してゆけばよいのであるから。例えば実習園においてお別れ会、お誕生会などで演ずる場合に5人しか役者がいないのであれば、そのまま5人で演ずればよいのであるし、また1クラス40人いて全員が役者を経験したいというのであれば、その多い数の分だけ増幅させればよいということになるかと思う。そういう場合には本来キャラクターとしては描かれていないものをキャラクターにひきあげればよいと思うのである。背景として描かれた状況設定の木々や草花、あるいは月・星・太陽・川・海などにもその役を振り当てて演じてみてはどうだろうか。キャラクターとしてひきあげても無理に台詞をつける必要はない。照明のひかり、衣装の色と形、流れる音楽などなどに即した動きをつければよいのである。それで 季節も時も描かれると思う。あとは観る立場の人の感性からの反応がプラスされればよいのである。急場で演ずる場合の音楽は既製のものの挿入もよいと思う。実習中などの場合には、こどもたちが日頃好んで歌っている歌のメロディーを借りてきて、それに歌詞や台詞をつけるのもより効果的であると思う。時間に余裕のある場合にはもちろんオリジナルである事は望ましいと思うが、対象がこどもたちで

ある事を考慮して馴じみ深いメロディーを使って誘い込むこともひとつのテクニックかと思う。そしてオリジナルのメロディーの場合はそのメロディーを1回だけの出番とはせずに

歌詞を替え、あるいは楽器の種類を替え、音色を替え、テンポを替えるなどの変化によって場面転換を図るという使い方でも何度も登場させるのは対象に対しての親切でもあるし、また上手な演出でもあると思うのである。脚色をし、曲や動きを付ける場合、その原作の持つオリジナリティをそこなう事のないものであって欲しい。過剰なサービス精神の押し売りは得るところのないものとなり易いので気を付けたい。その事をひとつ心に留めておくとういと思うのである。この作家の作品はまずページをめくる前の表紙から既に物語が始まっている事が多いのである。表紙をひとつたりグルリと見て楽しむこともすすめたいと思う。この“11ぴきのねこ”はシリーズになっていて『11ぴきのねことあほうどり』(1972年刊)、『11ぴきのねことぶた』(1976年刊)、『11ぴきのねこふくろのなか』(1982年刊)とあり、ちなみに『11ぴきのねこ』は1967年刊行で1982年51刷になっている。この他に絵巻えほんとして『11ぴきのねこマラソン大会』などがある。

グリム童話にフィッシャーの絵での『ブレーメンのおんがくたい』は年老いて邪魔者となってしまった ろば 犬 猫 にわたりの4人(?)が つぎつぎと偶然に出遭う。その悲しい境遇を互いに慰め励まし合い、4人力を合わせて人間の泥棒たちを追い払い安住の地を得て4人仲良く暮らすという物語である。智恵の働かせ方、力の合わせ方がたのしい。黒の固い細い線で縁どりをした可愛い絵であるが、余白の白と冴えた色をバランスよく使っているためだろうか、軽みがある反面妙に迫力と説得力がある。ここで使われているのは、ラッパにたいこにクラリネット。この作品も学生たちにはアレンジして表現しやすいようである。実際に効果音楽として楽器

を使いやすい人形劇・影絵、あるいは人形劇に影絵を取り入れるなどはもちろんのこと、学生たち自身がその役に扮してのものはもっと楽しい。主人公たちの動きで象徴的なところを取りあげ少しだけ強調して何回か繰り返して演じてみると、こどもたちにその小さな生き物たちが身近に、またそのストーリーの底に流れるものが優しく伝わるに違いないと思うのである。

ケート・グリナウェイの華麗な絵の『ハメルンの笛ふき』は怖いストーリーだが、この笛の音に興味を感じる。——ハメルンの町にはネズミが大量に繁殖をし正常なる市民生活を営むことが出来なくなってきた。そんな時に笛ふきがやって来て笛の音でネズミを誘い出し川へと連れ込んで溺死させて町を救った。しかし町の人間たちは自分たちの希望がかなえられると笛ふきとの約束は反古にしまった。そこで笛ふきは約束を反古にした事への報いとして町のこどもたちを、たった一人のこどもを除いて連れ去ってしまったのである。こどもたちは嫌がるのを無理失理に連れ去られたのではなく、笛ふきの笛の音に嬉々として付いて行ったのであった。たった一人しかこどものいない大人だけの町とはどんなものだろうか。うそ寒く身の毛の彌立つ思いがする。——怖いお話しに華麗な絵が余計に好奇心を誘うのである。あの若者の吹く笛の音は、こどもたちを誘い出し連れ去ったその笛の音は一体全体どんな音色だったのだろうか。とてもこころよい音色であったに違いない。是非とも一度は聞いてみたいものだと思うのである。こどもたちと一緒に、いやいや連れ去られるという取り返しのつかない賭がなければナとは思っているのである。自分自身のなかにあるエゴイズムを見せ付けられて、それでもと半分身を乗り出しかねないものを感じる。そんな思いでもういっぺん見ると、ケート・グリナウェイの絵は静かに誘惑と警告の鐘を遠く近く鳴らしているように思えるのである。

レオ＝レオニ の作品に『おんがくねずみ

ジェラルディン』——はじめて おんがくを  
きいた ねずみのはなし——というのがある。  
これはジェラルディンというねずみが見たこ  
ともない程大きいパルメザン・チーズを見つ  
けたことから物語は始まる。彼女は自分の見  
つけたチーズを仲間たちに分け与えるために  
せっせ、せっせとチーズをかみ切った。気が  
付いてみると彼女にかみ切られたそのチーズ  
はしっぽのききっぽをフルートにして唇にく  
わえたねずみの像になっていたのだ。夜にな  
るとその像は今まで聞いたことのない美しい  
音を奏でた。はじめて聞いて彼女は〈これは  
音楽なのだ〉と思った。それから彼女は毎日  
夜になるとその音楽を楽しんでいた。ある日、  
仲間たちは空腹のためにその像になっている  
チーズがほしいとねだった。そのことを聞いた  
彼女は音楽がなくなるからダメだと断わる。  
しかし音楽というものが何ものであるかを知  
らない彼らは納得しない。そこで彼女は音楽  
というものを彼らに教えようと思うのだが、  
その像は夜にならないと音楽を奏ではしない  
のだった。夜まで待てない彼女は像の姿を真  
似て自分のしっぽをくわえて音楽をつくらう  
とする。その像ではない彼女がいくらその像  
のポーズをしたからといっても同じ音楽が奏  
でられるはずがないのだが、彼女は何度も何  
度も試みた。そのうちに彼女の記憶にある像  
の奏でる音楽と同じ音楽が奏でられたのだっ  
た。それを聞いた仲間たちは音楽というもの  
が何ものであるかを知った。そして、これが  
音楽であり、それをこの像が作り出すもの  
であるのならチーズはもう要らないと言うの  
である。しかし彼女は、今自分がその像と同  
じ音楽を奏でることができたことによって、  
その像の音楽は自分のものになったのだから  
そのチーズの像は全部食べてよいと言うので  
ある。——音楽の好きな人間なら共感もし、  
作者のレオ＝レオニに感謝したくなるに違  
いない。また 言語 の領域で取りあげたレオ  
ニの『フレデリック』の姉妹編ともいうべき  
ものに詩人フレデリックが4人の仲間のため  
に書いた詩にメロディと楽譜のついた『はな

に いろを ぬるのは だれ?』がある。

また楽譜のついている絵本に おの ちよ  
の『おたすけねこさん』がある。これはとら  
ねこが何処からかやって来てくれて、いろん  
な家事仕事を手伝ってくれるのである。ほん  
とうは作者が忙しい時、猫の手でも借りたい  
なと思っている時に「おたすけしましょ！」  
と行って来てくれるといいなあという思いで  
作ったようである。このおたすけねこさん  
には飼い猫独特の人間クサイ表情が見えて愉快  
である。うたは12歳の娘さんが一緒に作っ  
てくれたとのことである。

『春のうたが きこえる』は市川里美の絵  
本。この絵本には音符は出てこない。しかし、  
春の情景がある。眠っているこどもを起こし  
にきた風の声と朝のひかり。クロッカスの  
花々。「おーい、あそぼう」とよぶ仲間たちの  
声。花に水をやり、野原であそぶ。銀色にひ  
かり、ふくらんでいる猫やなぎの芽。小父さ  
んが小枝を削って笛を作っている。

みんなも一緒に作ってもらった。そして、「さ  
あ、しゅっぱーつ！」……。繊細でやさしく  
てやわらかな動きを沢山ふくんだ絵。今にも  
春のにおいがかぎ取れる気がする。ほっくり  
ほぐれたやわらかな土のにおい、うっすらと  
汗ばんだこどものおでこが感じられる。ペー  
ジをめくるたびに次つぎに春が花開く、そん  
な気分になる絵本である。感じたままを声に  
出して音に出してみたらどうであろう。

ドナルド・エリオット文、クリントン・ア  
ロウッド絵、芥川也寸志・石井史子訳の『絵  
本 ワニのオーケストラ入門』というのがある。  
これは絶対におもしろい!!と書きたい衝  
動に駆られる絵本である。まず目次を見てほ  
しい。はじめに とあつて第1部、第2部  
に分けている。第1部 一つ一つの楽器 と  
あり、まず〈弦楽器のなかまたち〉として  
ヴァイオリン ヴィオラ チェロ コントラ  
バス についてである。〈木管楽器のなかまた  
ち〉では フルート オーボエ クラリネット  
バスーン についてである。〈金管楽器の  
なかまたち〉では トランペット フレンチ

ホルン トロンボーン チューバ についてである。〈打楽器のなかまたち〉では トライアングル ティンパニー シンバル 大太鼓についてである。〈なかまのいない楽器たち〉では ハープ チェンバロ ピアノ についてである。そして〈そのほかの楽器をもう少し〉とある。第2部には〈最後の音楽のなかま〉とだけあり 指揮者 オーケストラ について書いている。この目次をみただけで、音楽に少しでも興味を持っている人であれば作者のセンスににんまりと笑みを浮かべるに違いない。一つ一つの楽器がどんな風に描かれているのか、自分のよみがあたっているのかどうなのか早く次のページをめくりたいという気分になるに違いない。まず第1番目に紹介されている ヴァイオリン は、バッハやヘンデルの肖像画に描かれているような王朝風のかつらを被り衣装を身につけたワニが胸を張り、気取ったポーズで「私だけで、なんにもかもやれるんですから——と私は思っているんですがね。」という文章をひっさげて描かれている。非常に愉快である。“あなたもそう思ってみていたんですか。実は、私もそう思ってみていたんですよ。”と同意をすることに何にも抵抗を感じず仲間意識やら共犯者意識めいた連帯感を味わうのではないのかと思うのである。ワニの表情が持っている楽器一つ一つの個性になりきって実にユーモアたっぷりに描かれている。これが全ページにわたって描かれているのであるから嬉しい。はじめに のなかでは——音楽や美術のもっている特徴の中で、大きなものはといえば、どちらもいろいろなレベルで、人の心にうったえ人の心の中にはいりこんでいくということでしょう。——という文章がある。

第2部の 指揮者 のページには、「私はリーダー、私は大将、ナンバーワンです。」とあり オーケストラ のページには、「さあ、最後に全員集合です。私たちは一つ一つの楽器や、それぞれの楽器のなかまというよりも、もっと大きなファミリーの一員として登場します。」とあり、舞台の全員勢揃いをしている

ところでは、「私は人々の魂を高めることができます。」と書いている。ここまでページをめくってくると、共犯者意識めいた連帯感などという照れかくしのかっこつけはどこへやらで純粹に音楽を楽しもう、楽しみたいという欲求がふつふつと湧きあがってくる。その熱い思いを抱いたことを自覚しただけでも仕合わせだ、と感じる絵本である。正しく入門書である。

ドナルド・エリオット文、クリントン・アロウッド絵、蘆原英了・薄井憲二訳で『絵本カエルのバレエ入門』もある。『絵本 ワニのオーケストラ入門』に引けをとるということではなく、十二分にその期待に応えること請け合える絵本である。

### 絵画製作・造形

言語 の領域で取りあげた『おおきなおおきなおいも』はこの領域でも活用される。教師の提案でこどもたちが想像をひろげる。そしてそのおおきくおおきく育てたおいもを描くための用紙の準備が始まる。その準備作業そのものが描く意欲を更に更に昂進させている。おいもを描きながら、「まだ まだ」と言いつつ用紙の補充をする。臨場感にあふれている。描いたおいもはヘリコプターで園庭に運び、プールに入れては いもまる と命名する。つぎは恐竜に見立てて いもごうるすとなり、おいもパーティとなって……。首尾一貫して自分の手で作って楽しむことに徹した絵本である。

小林 実文、林 明子絵の『かみひこうき』は作り方とともにあそび方を紹介している。そしてより確実に楽しむための条件を導き出し、そのための工夫をと判りやすく描いている。男の子に限らず、女の子でも折り紙がほしくなる絵本である。

《かがくのとも》185号の『かみコップでつくろう』は手軽に用意できる紙コップとハサミ、カッター、セロテープ、サインペンなどを使ってできる13種類の動くおもちゃの作り方とあそび方を楽しく描いている。また181号



の『だいこん だんめん れんこん ざんねん』と192号『むかいあわせ』は 自然 の領域との関わりが大きい。181号は野菜、果物、クルマ、家、鉛筆などの縦・横の断面を紹介し、その形状のおもしろしさを楽しむと同時に、そのものの中身・本質を更に更に深く知ってもらうひとつ上の楽しみを味わおうと呼びかけている。これは版画あそびをする以前によく取りあげて行うスタンプングなどの導入に利用できると思うのである。また192号では蝶々、あさり貝、てんとう虫、朝顔、雪の結晶、動物の顔などを取り上げており左右対称の紹介をして、形の不思議とおもしろさの発見を促している。これはまたデカルコマニーなどの製作の導入などにおいて利用できるものと思うのである。206号の『あきカンでつろう』も楽しい絵本である。ややもするとその利用後の処理方法をめぐって嫌われがちなあきカンにビニールテープ、ガムテープ、乾電池、輪ゴム、針がね、釘、かなづち、割箸、ストローなどとこれも手軽に入手できる材料、道具などを利用して作れるものである。古代エジプトにおいてはあのピラミッドを作るための石運びにその原理を利用したのではないかと思われる“らくらく カンカン”やストローとセロファンテープを使って“カンぶえ”を、そして紙製のガムテープと割箸、カッター、セロファンテープを使っての“いんさつ カン”はなかなか見事である。謄写版のローラーの応用で“謄写版”そのものよりもその利用の仕方はもっとモダンである。“カンけり”のみならず“カンつり”“カンカン でんぼう”などなど11種類のおもちゃの作り方とあそび方を楽しく紹介もし更に読者の新発見・新発明を促して余韻がある。213号の『うずまき——しぜんの なかの かたち』はおもしろい。ひつじのつ、かたつむり、くものす、ひまわりのはなのなか、まつぼっくりなどなど、我々が普段なにげなく見過ごしているもののなかにその“うずまき”を見て、そこから大きな宇宙を作者はみている。折り込みふろくもとても素敵である。

神沢利子文、林 明子絵の『ぼくのぱん わたしのぱん』も 自然 の領域と関わりの多い絵本である。姉と2人の弟の3人で小麦粉・塩・ミルク・卵・バター・イーストなどの材料を使い、パンになるまでの過程をきょうだいげんかもしながら、いろいろ楽しみながら作り食べるというもの。ふくれた生ぱんを粘土あそびをする要領で、ねじりぱん、うずまきぱん、ねこぱんなどを作る。小麦粉粘土のあそびの発展でクッキーを作る時の導入に利用してみたらどうだろうか、冬の季節のクリスマスを迎える時期であれば、気分は上々かも知れない。

トニー・ロスの『ヒューゴというどろぼう』ではネズミのヒューゴがなりたての魔女に出遭う。この魔女は人間の女の子である。元の姿にもどりたいたのだが、呪文を書いた本の文字が消えてしまったので読むことが出来ず、魔法をとくことができない。文字の消えた理由は色泥棒が文字の色を盗んで行ったためであったという。発想が意表をついており、登場するものたちの表情が楽しい絵本である。

かすや 昌宏絵、渡 洋子詩の『ひかりがいきている』はすてきな詩

ひかりは いのちの もと うちゅう  
のはじまり いろいろな かたち いろ  
いろな いろ いのちが いきる

で始まる。その絵からは生命の誕生、生命の躍動がいきいきと伝わってくる。素晴らしい絵本である。

レオ＝レオニの『うさぎを つくろう』——ほんものになった うさぎのはなし——は鉛筆とはさみが鉛筆の提案でうさぎを作ることから始まる。鉛筆は白い紙にうさぎを描き、はさみは色紙を切り、貼り合わせてうさぎを作った。2ひきのうさぎはすぐともだちになった。あそんでお腹の空いた2ひきのうさぎはそれぞれの産みの親である鉛筆とはさみににんじんを作ってもらって食べた。しかし、つぎにお腹が空いた時、2ひきとも にんじんを作ってもらうことはできなかった。2ひきは探し歩いた。ようやく見つかること

ができたそのにんじんは、影のある本物のにんじんであった。2ひきがかぶりついた。すると2ひきにはそれまでなかった影ができたのであった。そのことで彼らは自分たちが本物になったことを知った。レオ＝レオニの絵本には寓話的な要素が多分にあつて、怖さを感じることもある。しかしこどもの精神が自由に生きている。そしておもしろく楽しいことも確かである。表現にはマンネリがない。一作ごとに常に新しいものへの挑戦があり、成功している。創作の秘密の始源的なものを堅持している。そのことも強く魅せられる原因でもある。

加子里子の『にんじんばたけのパピプペポ』は楽しい名前のついた20ぴきのこぶたたちが美味しいにんじんを見つけたことからお話しは始まるのである。にんじんを食べたことでとてもよい子になったこぶたたちは、両親にも食べさせてあげたいと思い取って置いた。しかし両親はそれを食べないで殖やすことを考えた。汗を流して畑を耕やし、植えて花を咲かせて種を取った。その種を蒔いて更に多くの収穫をあげる。そしてそれを意地悪な人にもやさしい人にも、皆なに分けてあげる。耕した畑に水をやるために井戸を掘り、掘った時に出てきた粘土でレンガを焼いて図書館や保育園、劇場、そして最後に残った分で自分たちの住む小屋を作る。その過程がリズム感のある文章で語られる。畑の畝づくりやレンガ焼きなど、最近あまり見かけなくなり忘れかけていた仕事の手順などのひとつひとつの作業が懐しくすぐ実行してみたい思いになる。特に♫のしるしのついた太い活字の文章は読んでいるうちに自然にメロディがついてくる。その語路のよさに誘われて少しずつ変化をつけて読んであげるとこどもたちは大喜びをしてくれる。これも音楽・音楽リズムの領域で取りあげた『11ぴきのねこ』同様にオペレッタなど形を変えて活用のしやすい絵本である。しかし前のものと異なりこの作品の場合には登場人物(!?)も多くストーリーの展開が早く場面も多いことなど注意する必

要がある。必ずしもひとつひとつの場面に忠実に向きあわなくとも良いかと思う。大きな場面展開の部分を誇張し、パターンの繰り返しにはメドレー方式で軽く流してゆけばよいと思う。六領域があますところなく入っている絵本のように思っている。

また加古里子に『うつくしいえ』という絵本がある。画家の生きていた時代の社会情勢なども加えて作者の好んでいる絵に対する率直な思いがある。絵に対する押しつけがましいところがない。レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ＝リザ」 ヴィンセント・バン・ゴッホの「ひまわり」 レーピンの「ボルガのふなひき」 北斎の「ふじさん」 パブロ・ピカソの「ゲルニカ」などを取りあげ

うつくしい えは、えを かいたひとの

うつくしい ころが

あらわれているのです。

と書いて入門へと手びきしている。一度手に取って開いて見て、自分の鑑賞の仕方と比較してみたらどうだろうか。

先程以来、一冊の絵本が 六領域 のそれぞれの領域と相互において密接に関連し合っているということを述べており、特に 絵画製作・造形 の領域に至っては 自然 の領域との関わりの深さを強調してきたが、ここに記す作品はむしろ 自然 の領域そのものに入れた方がよいのではと思われることと思う。しかし敢えてこの領域に、しかも最後に登場したのは発刊されたのがつい最近であったことと、その内容の素晴らしさによるのである。それは、〈かがくのとも〉202号の『ふゆめ がっしょうだん』である。作者は富成忠夫、茂木 透写真、長 新太文である。絵は総べて木の芽の写真である。ひとつひとつ、実に豊かな表情を持つ、春を今か今かと待っている生きているものの顔がそこにある。あずきの芽などは、その文の役を担って3回も登場し、全体に軽快なリズムを添えている。たいようも に添えられたくずの芽には壮麗な太陽のシンボル化された化身にも見れるしかぜも のにがきの芽には風の神さまの風格

がある。1 ページ、1 ページを次への期待をこめてめくって見ると、企画、構成そして作品づくりのうまさに舌を巻くと同時に、ただただ自然の造形の成す仕事の偉大さに驚くばかりである。願わくば、これらの木々の芽が、また地球上に生きているものたちが、あの春の日の陽光のあたたかさを満喫できたらいいなと思うのである。

#### おわりに

ここで取りあげた他に更に更に多く、よい絵本がある。しかし、まずはここで取りあげ

た絵本を一度は手に取って見てほしい。経験を積み重ねることも大切であると思う。えらび方が上手に、勘ばたらきが鋭くなるためには、絵本だけに限らないことである。古典ものの現代ものを問わずに多くの文学作品やそれぞれの分野の専門図書とつきあうことであると思う。更に読書の範囲だけでなしに、身体を動かすことにも挑戦することである。そして継続することである。正しく 六領域 にわたって出来る範囲で結構であるから万遍無くつきあうことであると思うのである。